

◆経営と健康⑦⑤

人の言うことを記憶して善きを用い
悪しきは捨てようと心掛けている

阿部正弘

一龍斎貞花

講師

福山藩・阿部家は代々老中を輩出した家柄。幕府の要職にある大名は、江戸に常駐勤務である。参勤交代も金がかかるが、江戸にずっと勤務しているのは役職上金がかかる。城下には、瀬戸内海に面した鞆の浦があり、朝鮮通信使が宿舎とした福善寺。瀬戸内海の美しい島々が一望でき、「日東第一形勝」朝鮮より東で最も風光明媚な場所とたたえた、今も景勝の地。

江戸時代は、わずかな職務手当はあるものの、上屋敷、中屋敷、下屋敷の管理費、登城の際仰仰しくしなくてもある程度の人数による供揃え、乗り物などすべて自己負担。こうした江戸での支出多く、藩財政は常に苦しかった。

それでも老中という大役にはなかなか就任できるものではなく、いろいろ工作

する大名も少なくなかった。なかには悪徳商人とつるんで私腹を肥やす大名もあり、今とちっとも変わりはない。

阿部正弘は、役職を利用する老中ではなかった。

幕末の動乱のなか、名宰相とうたわれ、黒船来襲・将軍後継者問題（篤姫の夫、13代家定に子なく、水戸の慶喜だ、和歌山の慶福＝後の家茂だと実力者が2派に別れた）などに対処し、大奥の評判もよく、大奥への対応は歴代老中のなかでもナンバー1といわれるほど。

それもそのはず、11代将軍家斉の時代に大奥へは多くの僧侶が入りこみ、風紀を乱していた。このスキャンダルが明るみに出るのを防いだのが、当時寺社奉行だった阿部正弘。大奥の受けがよいのも道理である。

人の言うことを記憶して善きを用い

悪しきは捨てようと心掛けている

福山藩内においても、人材育成のためそれまでの「弘道館」を発展的に解消し、「誠之館」を建設し藩校の充実を図るとともに、庶民にも聴講を許すという名君でした。

登城するや、役人が次々と報告や指示を仰ぎにくる。各藩の大名や役職者が陳情にくる。今の時間で午前9時頃から午後2時3時まで、多い時には1日40～50

人という状態。

肥満だった正弘、茶坊主があとで正弘が坐っていた席を見ると汗のため湿っていた。それでもいささかも休むことなく平然としていたという。家へ帰っても諸大名や旗本など、訪れる者がいたという。こんなに大勢の人の話を聞き、返事をするが、自分の意見はなかなか言わない。あるとき、昵懇の松平春嶽が、

「あなたは人の意見を聞くばかりでどうしてご自分の考えや、意見を言わないのですか。よい試案をお持ちでしょうに」

すると伊勢守正弘、莞爾と笑って

「自分の意見を申しますと、それを証拠にされます。もし失言などしました場合には、職務上の失策となりましょう。ですから人の言うことをよく記憶して、善きを用い、悪しきは捨てようと心がけております。その場の思いつきなどで意見を申しますと、得てして間違いがありますので、よく考えて発言しなければいけないと思っています」

この言葉に春嶽「さすが伊勢守」と感心したという。

話し上手は、聴き上手という言葉がある。私など、人の言葉をさえぎって、思いつきでしゃべってしまい、敵をつくったり、あとで反省することしばしば。

罪を犯した人を更生させる手助けをする保護司は、自分からしゃべらず、相手

に話させるようにする。ポツリ、ポツリと相手が話し出したら更生させるスタートという。耳が2つで口1つというのは、相手の話を2つ聴いて、1つ話すということ。だから耳が2つあって口は1つだという。

党を代表する政治家の中にも、その場でいい子になろうと違う意見を言い、いくらお金があってもキングメーカーになれない、軽い言動の政治家といわれたセンセイがありましたね。

幕末の激動の時代だけに、老中という重要ポスト、その言動は大きな責任があった。それを心得ていた正弘は、矢張り名宰相といわれる器でありました。

惜しむらくは、昼日中から若い女性と袴の中でたわむれ、見かねて家来が注意したほどだったが、多忙の中にもこの道ばかりは別で時間を作ったんでしょ、39歳の若さで腎虚でこの世を去り、アメリカ公使ハリスが、「伊勢公殿の死は、日本にとって大いなる不幸」とまで言ったという。トップは呉々もご注意を。

正弘があと20年生きていたら、安政の大獄はなかったであろうし、徳川幕府がもう少し続いたかもしれない。政権交代がなされたとしても血を見ることはなく行われたかもしれない。長命の大切さ。